新得町で出会ったのは、自分の暮らしに時間をかける人たちでした。

Interview

田代 陽子

TASHIRO Yoko

『空想の森』監督

photograph by TAKA　text by Reiko Hisashima

北海道のほぼ中央に位置する小さな町、新得町。ここで1996年から、手づくりの映画祭が行われている。まるで村祭りのような、この「空想の森映画祭」でドキュメンタリー映画の面白さに触れ、とうとう1本の作品を撮ってしまった女性がいる。それが田代陽子監督だ。

「新潟県の阿賀野川流域に暮らす4組の老夫婦を追った佐藤真監督の『阿賀に生きる』を観たんです。撮られている人たちがとてもチャーミングに描かれていて、こういう目線の映画はいいな、と思いました」

その後、映画祭で知り合った映画監督のドキュメンタリー製作の現場を手伝い、撮影や編集など映画製作の体験を積んでいった。そして、2002年、いよいよ田代さんの撮影がはじまった。

「この新得町での暮らしを撮りたかったんですよ。神奈川県で育った私は、北海道に来てはじめて野菜のおいしさを知りましたし、農業で暮らす人たちとも出会えた。24時間、仕事と暮らしが密接につながっていて、そこで営まれているのは豊かな暮らしでした。それまでの自分になかった世界と出会い、そこに焦点を当て、"画(え)"でつないでいきたかったんです」

田代さんがカメラを向けたのは、さまざまな人たちが共に生きる「新得共働学舎」で働く山田聡美さん一家と、1970年代に新得町に入植した宮下喜夫さんご夫婦。はじめは、自分たちの暮らしが撮影されることにとまどいを見せていたが、田代さんは、彼らの生活に入り込み、ともに働きながら徐々に撮影することを、みんなに納得してもらったという。

「今日は、バイトなの、それとも撮影なのと言われたりして(笑)。みんなも、次第にカメラがあることを意識しなくなりましたね」

そう田代さんが語るように、スクリーンの中の新得の人たちは、みんなとても自然な姿を見せている。なにげない食事の風景、赤ん坊をおんぶしながらの畑仕事、朝のゆったりとした家族3人の時間、ていねいに行われるチーズづくり……。まるでカメラなど存在しないような"画"がつながっていき、観る側は新得町の人たちと同じ時間を過ごす。

トータルで撮影したのは90時間以上。田代さんにとってはどれも大切な場面で、「これ以上落とせない」と考えた時点で9時間半の作品になっていたそうだ。それをさらにブラッシュアップし、しかし全体のゆったりとした流れを損なわないよう編集し、出来上がったのが『空想の森』だ。

完成した作品を持ち、全国を回って自分の手で上映しようと思っていた田代さんだが、思いがけずも東京で劇場公開が決まり、9月にはあいち国際女性映画祭での上映も決まっている。「海外の映画祭にももっていきたいですし、もちろん今年の『空想の森映画祭』でも上映されます」と田代さん。

静かだが、しっかりと地に足をつけて"農"のある暮らしを営む人たちの姿から感じられる"まっとうさ"は、多くの人の心をつかむのではないだろうか。

北海道で営まれるゆったりとした"農"の暮らし。『空想の森』

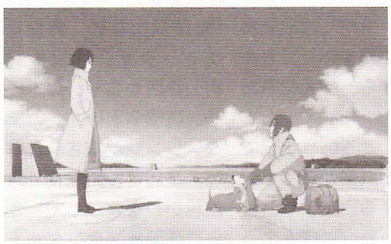
北海道・新得町で営まれている暮らしを、社会に馴染めない人、障害を持つ人、いろいろな人たちと共に生きていこうとする農場、新得共働学舎で、子育てをしながら働く山田聡美さん一家、そして70年代に入植した宮下喜夫さん夫妻、この2つの家族の暮らしを軸に、1年間、たんねんに追った記録。なにげない日常の風景が、なぜか心に染み入ってくる。

監督／田代陽子　撮影／田代陽子・一坪悠介

録音／岸本祐典

現在、ボレボレ東中野にてモーニングショー(日曜日はレイトショー)。

永遠の生が約束された若者たちは、幸せなのだろうか?



©2008 森 博嗣／「スカイ・クロラ」製作委員会

『スカイ・クロラ』

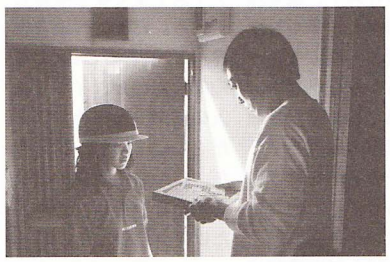
"ショーとしての戦争"で戦闘機のパイロットとして闘う「キルドレ」と呼ばれる子どもたち。彼らは、思春期の姿のままで、戦争でしか死ねないという。永遠の生を得たキルドレたちが抱く焦燥、閉塞感――それは、今の若者たちの心と通じるものがあるのかもしれない。そして、"死ねない"という現実の中で、彼らが見つけた"生"の実感はどんなものだったのか?　全国一斉公開中。

それは、あなたたちと一緒に過ごせるところ。

『地球でいちばん幸せな場所』

いじわるな叔父さんの元を飛び出し、ホーチミン市にやってきたトゥイ(ファム・ティ・ハン)。路上で花を売るうちに知り合ったCAのラン(カット・リー)、動物園の飼育係のハイ(レー・テー・ルー)と疑似家族のような関係になる。それぞれに"孤独"を抱える3人が選んだ幸せは……。自分がいちばん幸せでいられる場所はどこなのだろうと、ちょっと考えたくなる。シネマート六本木ほか公開中。

3人のクリエイターが独自の視点で読み解いたTOKYO。



『TOKYO!』

今、東京は"世界で最もCOOLな都市"なのだとか。その東京を舞台に、ミシェル・ゴンドリー(米)、レオス・カラックス(仏)、ポン・ジュノ(韓)が物語を紡いだ。精神的に追いつめられた女性はある物に姿を変え、突然マンホールから怪人が現れ、東京の住人すべてが引きこもってしまう。3人が描いたそんな魅力的(?)な街、TOKYOを体験せよ。8月16日(土)～シネマライズにて公開。